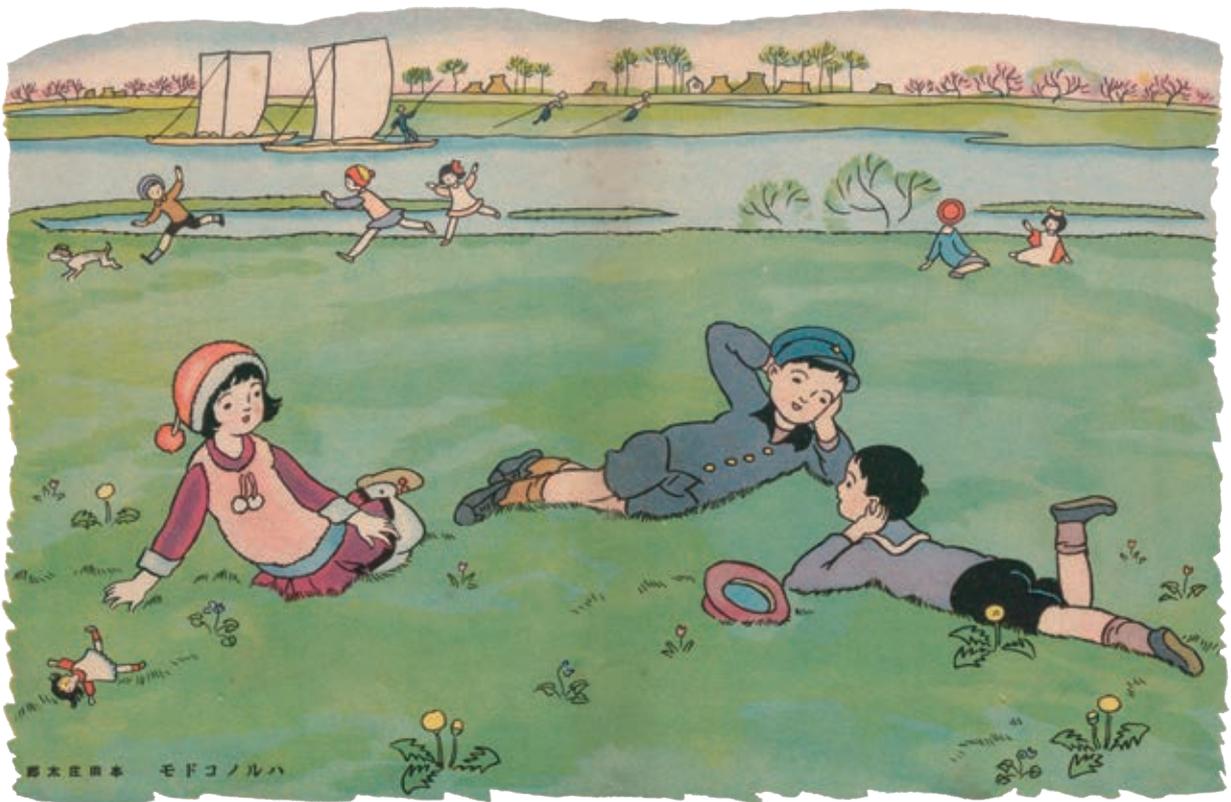


NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2021.4

国立国会図書館 月報



ビジョン 2021-2025 国立国会図書館のデジタルシフト
座談会「デジタルシフトを進めよう」

講演会「絵本への期待—平成の絵本作家と編集者、そして読者—」今田由香

国立

国会

図書館

月報

NO. 720
APRIL
2021
CONTENTS

1 『ちえのあけぼの』

— 文明開化の気風あふれる児童雑誌 —
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

24 館内スコープ

答えは本の中に

6 ビジョン 2021-2025

国立国会図書館のデジタルシフト

— 情報資源と知的活動をつなぐ7つの重点事業 —

30 NDL Topics

8 座談会 「デジタルシフトを進めよう」

18 講演会 「絵本への期待

— 平成の絵本作家と編集者、そして読者 — 今田 由香

25 電子展示会 「国立国会図書館憲政資料室 日記の世界」



表紙：「ハルノドモ」 本田庄太郎 画
『コドモアサヒ』2巻3号 1924.3
<請求記号 Z32-B163>

『ちゑのあけぼの』 —文明開化の気風あふれる児童雑誌—

久保智史



ちゑのあけぼの
福生社 (1号～17号は普通社) 1886- [1888]
26cm <請求記号 Z24-1288>

13号表紙。日本髪的女性が描かれ、その顔の各部位が逐語訳付きの英文で解説されている。上部には変体仮名で雑誌名が記載されており、仮名文字の背後には英字タイトル「THE DAWN OF WISDOM」が隠れている。

日本において「児童雑誌」というジャンルが確立したのは、明治20年代から30年代にかけてのこととされる。この時期、出版流通業の発達や、鉄道網の整備の進展によって、東京で発行された出版物は、地方まで行き渡るようになった。20年代の東京では、『少年園』（明治21（1888）年創刊）を皮切りに、児童文学史に名の残る雑誌が数多く刊行されていた。全国の子ども達がこの雑誌を愛読するようになったことで、現代まで続く「児童雑誌」が定着したのである。

しかし、それ以前には児童雑誌は存在しなかった、という訳ではない。全国的な知名度を得ることは叶わなかったが、地域の子どもたちに愛読され、一定の成功を収めた雑誌も明治前期には存在していた。今回紹介する『ちゑのあけぼの』は、そのような地方発の児童雑誌の一つである。

『ちゑのあけぼの』は明治19（1886）年11月、大阪市西区江戸堀に位置する普通社によって創刊された、「幼稚学生」向けの雑誌である。刊行は週刊だったが、17号の刊行後、1か月ほどの「暫ラク休刊」（18号）を挟み、発行所や



7号より、科学遊びの記事。厚紙を丸めて筒状にし、片方の目に当てる。その状態で反対側の目の前に手のひらをかざし、両目で筒の中を見ようとすると、手のひらに穴が開いたように見える。右目と左目の視差による立体視の仕組みを解説したものだ。記事の執筆者は世相にも踏み込み、幽霊や化物といった心霊現象はこの実験で見える手のひらの穴と同じくまやかしてあり、「開化（ひらけ）ざる国」で持て囃されるものに過ぎない、と非科学的態度を批判して記事を結んでいる。



25号より、英語学習のコーナー。初号から、アルファベット1〜2文字を単語・例文とイラスト付きで紹介していた。

編集人の変更を経て、月刊誌への転換を予告した67号（明治21（1888）年4月）を最後に、続刊は確認されていない。決して盤石な発行体制ではなかったことが窺われる。価格は創刊時点で1部5厘、サイズは四六判の4頁構成。毎号3,500部ほど発行され、大阪や京都、神戸など、関西を中心に読者を獲得した。

雑誌名『ちゑのあけぼの』は旧約聖書の言葉「主を畏れることは、知恵のはじめ」（箴言「第1章7節」）に由来するものと考えられる。記事についても、宣教師が編集に携わった雑誌・新聞から多数の引用を行っていることが指摘されている。このことからわかるように、キリスト教の強い影響下で誕生した雑誌であった。初代編集人であった佐治篤三郎は、アメリカの宣教師によって創立された神戸英和女学校（現・神戸女学院大学）で教鞭をとり、関西圏における伝道に尽力したキリスト者として知られている。

その内容を見てみると、4頁（後に8頁へ拡大）という極めて限られた誌面の中で、初歩的な英単語の講座から西洋の地理・科学・偉人・動物の紹



8号より、アメリカのミズーリ州在住のピーという人物が発明した、果物採器械を紹介する記事。末尾に、記事の情報源が「米国学術新聞」であることが明記されている。



- 1 本稿では、物語や科学読み物を中心に、多彩な記事を揃えた子ども向けの定期刊行物のことを指す。
- 2 当時のうどん、そばが1杯1銭。よってこの雑誌2部でうどん、そば1杯分の値段と考えられる（森永卓郎監修、甲賀忠一、制作部委員会編『物価の文化史事典 明治・大正・昭和・平成』展望社 2008<請求記号D2-J74>）。
- 3 明治期から昭和期にかけて活躍した、大阪の絵師。文久3(1863)年、16歳頃から活動を始め、明治8(1875)年に二代目貞信を襲名。明治43(1910)年に家督を譲り引退した後も、昭和15(1940)年に93歳で没するまで制作を続けた。上方浮世絵で知られるが、開花絵や西洋風の挿絵なども多く手掛けており、新味のある題材・表現を好んだ。

○参考文献

柿本真代『総合的児童雑誌『ちよのあけぼの』の誕生 近代日本における西洋児童文化の受容とキリスト教』『児童文学研究』44号 2011<請求記号Z13-625>
 樹居孝 編著『日本最初の少年少女雑誌『ちよのあけぼの』の探索 「鹿鳴館時代」の大阪、京都、神戸』かもがわ出版 2011<請求記号UM84-J65>
 永嶺重敏 著『<読書国民>の誕生 明治30年代の活字メディアと読書文化』日本エディターズスクール出版部 2004<請求記号UG11-H12>
 沖野岩三郎 著『明治キリスト教児童文学史』久山社 1995<請求記号KG411-G1>
 藤本芳則『明治期絵雑誌『ちよのあけぼの』』『児童文学資料研究』61号 1995.8<請求記号Z12-564>
 続橋達雄 著『児童文学の誕生 明治の幼少年雑誌を中心に』桜楓社 1972<請求記号KG411-17>

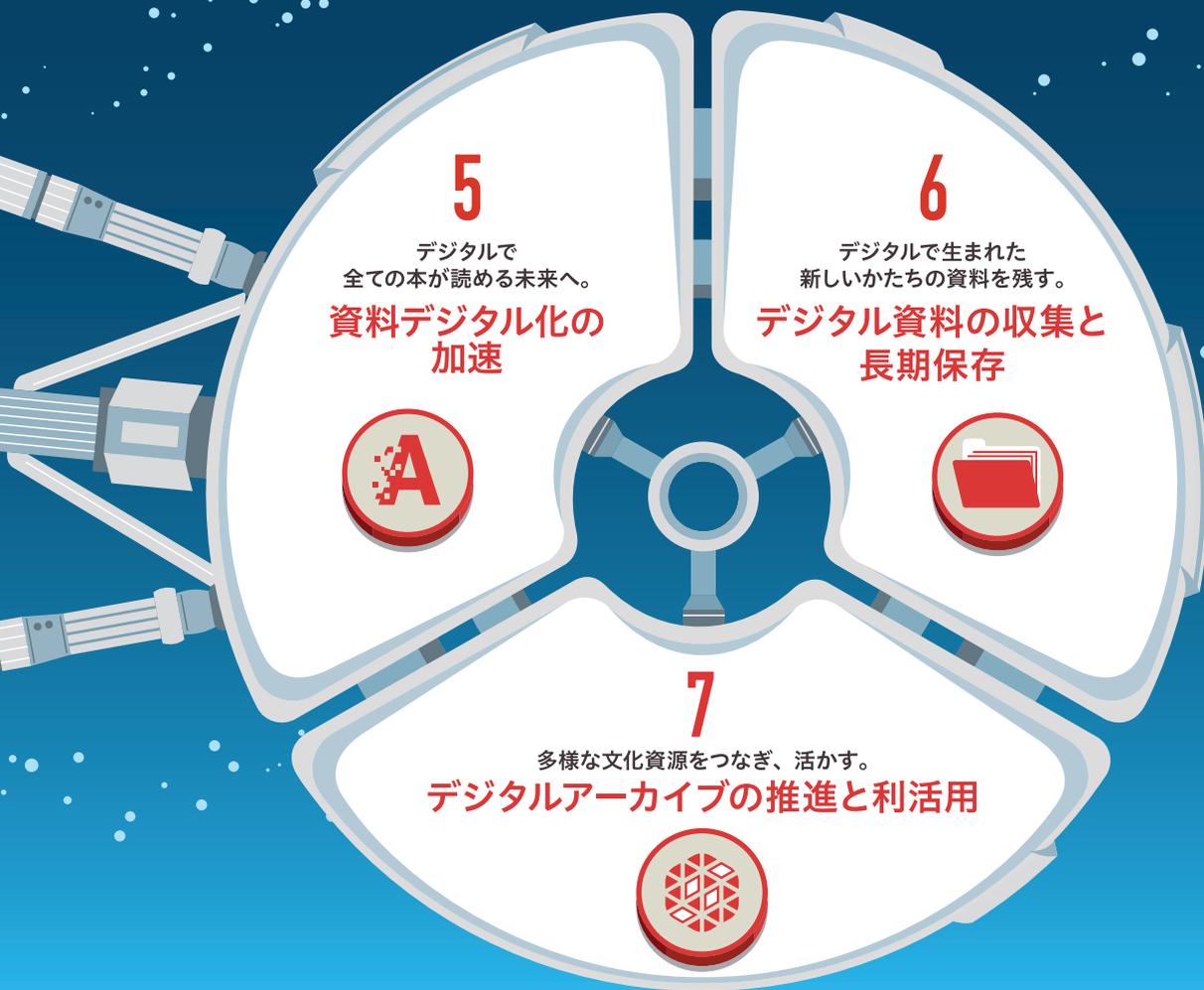
明開化期の混沌が色濃く現れている。「あけぼの」を称する本誌ではあるが、地方誌から全国誌へ、欧化主義から儒教徳育へ、という児童雑誌の過渡期にあって、むしろ一つの時代の掉尾を飾る雑誌であったともいえよう。

ビジョン 2021-2025

国立国会図書館のデジタルシフト

—情報資源と知的活動をつなぐ7つの重点事業—

国のデジタル情報基盤の拡充



資料デジタル化の加速

デジタルで全ての国内出版物が読める未来を目指し、この5年間で100万冊以上の所蔵資料をデジタル化します。テキスト化も行い、検索や機械学習に活かせる基盤データとします。



デジタル資料の収集と長期保存

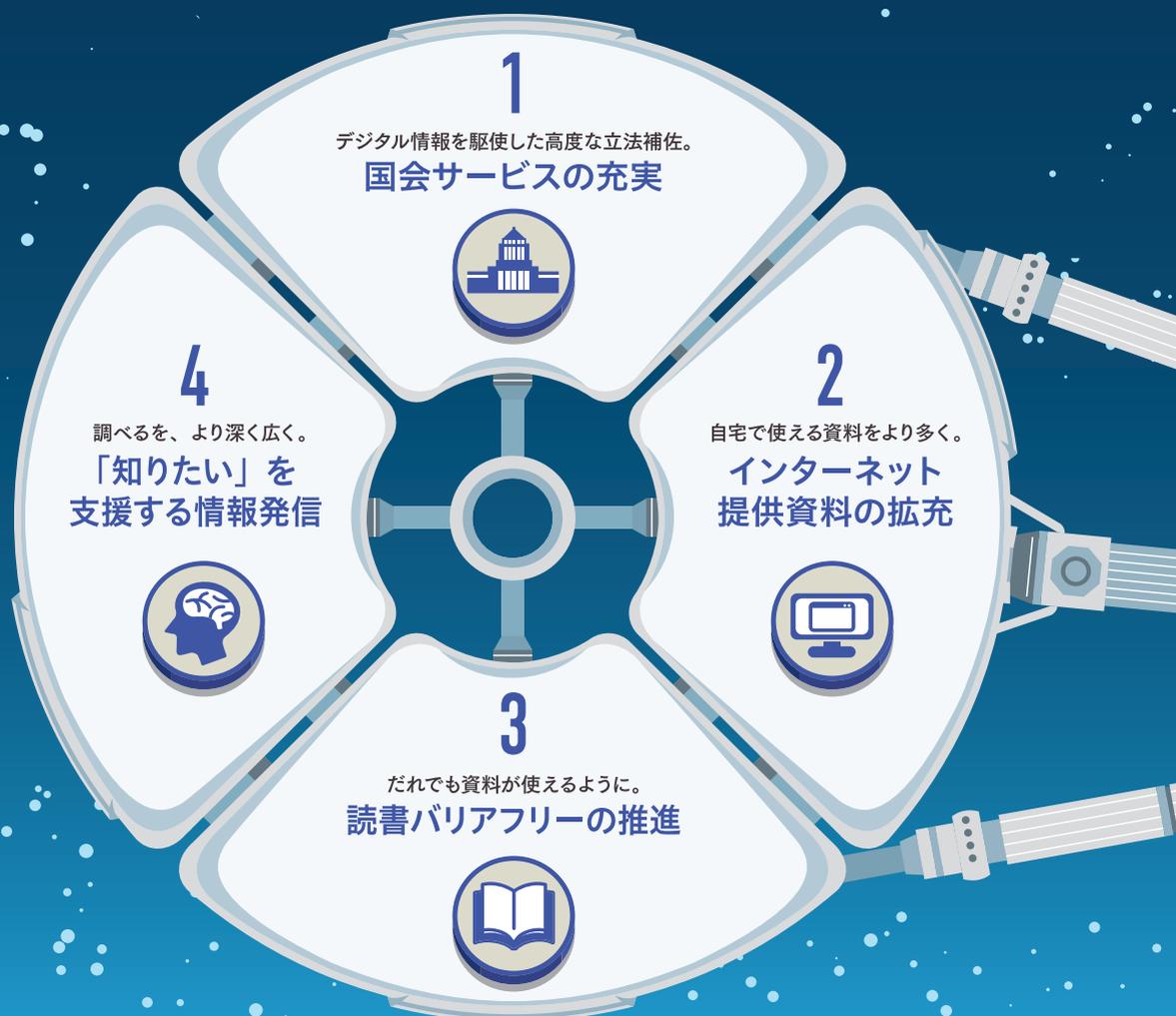
有償の電子書籍・電子雑誌の制度収集を開始し、著作者や出版社の協力を得て、安定的収集を実現します。また、他機関のデジタル資料の収集・移管、再生困難なデジタル資料の形式変換等、多面的な取組によってデジタル資料の長期保存を目指します。



デジタルアーカイブの推進と利活用

図書館の領域を超えて幅広い分野のデジタルアーカイブを連携させる「ジャパンサーチ」を通じて、多様な情報・データがオープン化され、活用が促進される環境づくりを支えます。

国立国会図書館は、新しいビジョンを策定しました。新しいビジョンは、重点事業と基本的役割の2部構成となっています。本誌では、ビジョンのキャッチフレーズである「国立国会図書館のデジタルシフト」を象徴する7つの重点事業とともに、ビジョン策定の経緯や意義を、館長を中心とした座談会で紹介します。



◀座談会へGO!

ユニバーサルアクセスの実現



国会サービスの充実

量的・質的に拡充したデジタル情報基盤と利便性を向上させた検索手段を用いて、さらに充実した国会サービスの提供を図ります。



インターネット提供資料の拡充

インターネットや身近な図書館で閲覧できるデジタル資料の拡充を図ります。そのための著作権処理や関係者との合意形成を進めます。



読書バリアフリーの推進

視覚障害等の理由で読書に困難がある利用者向けに、バリアフリー対応の資料の収集・検索・提供サービスと、利用しやすいテキストデータの製作支援を推進します。



「知りたい」を支援する情報発信

専門知識を活かして膨大な資料・情報をキュレーションし、効率的な調べ方のガイドや、知識を深めるための資料の紹介等、社会に役立つ情報を発信します。

5
デジタルで
全ての本が読める未来へ。
資料デジタル化の
加速



6
デジタルで生まれた
新しいかたちの資料を残す。
デジタル資料の収集と
長期保存



7
多様な文化資源をつなぎ、活かす。
デジタルアーカイブの推進と利活用



座談会 デジタルシフトを進めよう

吉永 元信 (館長)
田中 久徳 (副館長)
木目沢 司 (電子情報部電子情報企画課長)
司会：大場 利康 (総務部副部長)
※2021年1月6日実施

国立国会図書館のこ
れまでの「デジタル」
について

大場 今日デジタルシフトという
キヤッチフレーズに絡めながらお話を
伺えればと考えております。これ
までも国立国会図書館（以下「NDL」）
は情報技術の発展を取り込みながら
業務やサービスを革新し、変化を遂げ
てきたと思います。館長は、今日の
出席者の中で一番長くこの変化を
ご覧になってきました。これまでの
NDLのデジタルに関わる取組みに
関してどうご覧になっていらっしゃ
りましょうか。

吉永 私は1973年に入館しました。
当時は、あくまで資料を永遠に保
存するのが主眼で、利用に関しては
ラストリゾート、最後の最後に頼
るところ、という考え方をずっとと
ってきていました。まだデジタル
の入る余地はあまりなかったです。
デジタル化ということでは、書誌入



吉永 元信
館長



力の機械化が最初かなという風に思っています。

そういう流れの中で、第二の国立図書館を作ってほしいという要望があり、1982年に関西館プロジェクト調査会を発足させました。NDLは大きな目標を持つと、大きな力を発揮します。議論した結果、非来館サービスをどんどん拡充し、英国図書館で始まっていたドキュメントサプライ(1)を関西館の大きな柱にしようということになりました。ここで、ラストリゾートからファーストリゾートという発想の転換がありました。

その頃に、新しい技術を使って、図書館サービスをよくしていくこうと

いう流れが出てきました。ランカスターという人が書いた『紙からエレクトロニクスへ』(2)という本を、当館の田屋(3)さんが翻訳して持ってきて(笑)、読んで驚いた記憶があります。

そこで考えたのが1998年の「電子図書館構想」であり、その中に登場するのが「どこでも、いつでも、だれでも」という今でもよく使われるキャッチフレーズです。

資料的にもパッケージ系資料(CD、DVD等)の登場、OPACの公開、関西館の2002年の開館に合わせて、貴重書画像データベース(4)、近代デジタルライブラリー(5)が公開されるなど、電子図書館的なサービスの始まりの始まりがその辺りにあった

んじゃないかと思えます。

その後、2000年代後半には、全世界の書籍を電子化するというGoogle Booksの衝撃がありました。ちょうどその頃、情報工学の権威である長尾真元京都大学総長が館長に就任し、デジタル化を進める機運が高まり、同時に2009年、デジタル化のための補正予算ができました(大規模デジタル化事業)。

な理念が与えられていて、すごく理想的な仕事を行っていくこうとしているにもかかわらず、現実には十分なリソースがあるわけではない、ということがあります。理念や理想からしたら、実現できていない部分がいっぱいある。その乖離というのが、私はずっと気になってしまつて。ルーティンの仕事をするだけではなく、それを少しでも理想的なもの、良いものにしていくための、社会全体や時代の流れの中の大きなプロジェクトが必要なんだと思います。

大場 デジタルシフトの出発点が関西館設立にあるんだな、ということが今のお話で確認できたように思います。副館長からも感想があれば。

今は「情報」が物理的な媒体から電子に移行していく過渡期にあります。情報通信の技術がほかの技術に比べても圧倒的に進化のスピードが早く、情報を提供する機関であるNDLは技術の変化の影響を受けざるを得ない。理想と現実の乖離を解消するためには、デジタルシフトとい

田中 入館以来思っていることとして、NDLというのは法律で「真理がわれらを自由にする」という崇高

な理念が与えられていて、すごく理想的な仕事を行っていくこうとしているにもかかわらず、現実には十分なリソースがあるわけではない、ということがあります。理念や理想からしたら、実現できていない部分がいっぱいある。その乖離というのが、私はずっと気になってしまつて。ルーティンの仕事をするだけではなく、それを少しでも理想的なもの、良いものにしていくための、社会全体や時代の流れの中の大きなプロジェクトが必要なんだと思います。

情報格差、経済的な貧困と戦うために、図書館が、どういう形で

将来の知的保障をしていくことができるか



うビジョンを明確に打ち出すことができ、良かったなと思います。

大場 情報技術の発展によって、リソースの不足を補うことができる面もあるのではないかと思います。

次に木目沢課長にお伺いしたいんですけども、情報システムの専門家として入館され、その後もシステムの開発等の最前線で活躍されてきました。今までやってきたことの成果をどうとらえていますか。

木目沢 私は2006年に入館しました。すでに近代デジタルライブラリー、WARP^⑥といった電子図書館サービスが始まっていて、それらを統合発展させて、もっと大きなシステムを構築しようという時でした。その後、いろいろと現実的な検討を重ねて、現在の国立国会図書館デジタルコレクション^⑦を提供するデジタルデポジットシステム、ウェブサイトを収集するウェブアーカイビングシステム、それから電子書庫という3つの要素から

なるシステムに落ち着きました。

デジタルデポジットシステムの開発については、先ほどお話がありました大規模デジタル化事業で作成した大量のデジタル画像を搭載しなければならなかったのですが、どのくらいのデータ容量となるのか予測が難しかったため、ストレージを容易に追加拡張できる仕組みを設計しました。

また、画像データだけではなく、歴史的音源^⑧の収集も始まったため、音声データも搭載しなければいけませんでした。その他、貴重書や官報等、当館の多種多様な資料に合わせたユーザーインターフェースを容易に追加できる柔軟な仕組みが必要でした。そうした設計上の工夫によって、図書館送信^⑨や視覚障害者等用データ送信サービス等、初期開発後の追加サービスも一気に実現できました。

大場 先ほど副館長から話のあった、理想と現実のギャップをどういう風乗り越えていくかという一つの事例ですね。



次期ビジョン検討会議

大場 今回、次期ビジョン検討会議の座長を副館長が務められました。が、検討期間で特に印象に残っていることはありますか。

田中 2回くらい会議を開催したところで新型コロナウイルス感染症の流行が深刻な状況になりました。ビジョン策定自体を1年延期して状況を見守ってはどうかということも真剣に考えました。コロナにより社会全体が大きく変わっていくだろうという予兆があったので、それをある程度見極めたところでビジョンを考えるべきではないかと。しかし、いろいろ考えていく中で、社会変化をできるだけ取り込みながら予定通り作ることを決断し、5月から検討を再開しました。

につれ、社会が変わっていく中で当館がやるべきことがある程度明確になってきたのかなと思います。つまり、コロナによる社会の変化にまらず対応する、具体的には、情報アクセスを電子的な形に変え非来館型のサービスの比重を高めて、来館しなくてもできるだけ情報が入手できるような方向というのを前倒しで加速して進めなければならぬということとです。それ自体が、前のビジョン「ユニバーサルアクセス」を展覧させていくことであろうと考えました。

大場 もともとデジタル化を進めていくという方向性自体は以前から共有されていたと思うんですが、特に図書館を閉めざるを得なくなってしまうたということの影響をどうとらえるか、それがこのビジョンに大きく反映しています。その結果、明確

な方向性を打ち出せたというのが、今回の大きな成果だと思っております。

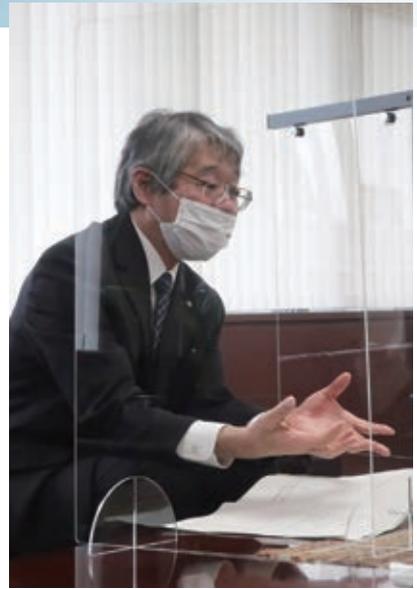
ビジョンの策定の過程で、5人の先生方にお話を伺っています。印象に残った点などあれば。

木目沢 福島先生のお話が印象に残

りました。特にNDLのリソースを来館サービスから遠隔サービスへ本格的にシフトさせるべきではないかというご指摘です。NDLが全国の図書館をサポートするコンサルのような機能を持つことに対する期待も語られましたが、それを実現するにはまだまだ課題があるなど感じまし

次期ビジョン検討会議 有識者ヒアリング

実施日	講師（所属はヒアリング時のもの）	演題
2020年 2月6日	根本彰氏（慶應義塾大学文学部教授、納本制度審議会委員）	国立国会図書館の将来ビジョンの考え方
2月21日	大向一輝氏（東京大学大学院人文社会系研究科准教授）	すべてがNDLになる
6月25日	大山礼子氏（駒澤大学法学部教授）	国立国会図書館の責務—立法府の一機関として—
9月11日	田中昭博氏（株式会社ポーラ人事戦略部 ワーキングイノベーションチーム）	ポーラの働き方改革
12月18日	福島幸宏氏（東京大学大学院情報学環特任准教授）	『図書館機能の再定置』と国会図書館の役割



田中 久徳
副館長

人類の未来のためにも文化、学術研究をもっとリスペクトすべきなのではないかということをご頃強く感じます

員に新しい取組みを説明するときにもビジョンと絡めて説明するということをお話しされたのが非常に印象に残っています。

に、デジタル化に関する課題、これからの希望についてお聞きしたいのですが。

た。

田中 根本先生も国民を統合していくという意味での国立図書館の役割を提起されました。大向先生は、新しい情報技術の浸透により、作ることに使うことが一体化していることで、情報を活用する人たちと一緒に仕事に取り組む環境を作ることが大事ではないかという、示唆に富むお話をされました。

大場 大向先生の話で印象に残っているのは二つの〇というお話。おっちょこちょいとおせっかいという、二つの要素を持った人が活躍している社会というのがこれから大事な

じゃないかと。私も結構おっちょこちょいなんですけど（笑）、そういう社会になればいいなと思いつながら、お話を伺っていました。

ユニークだったのが、ポーラの田中さんのお話ですね。ポーラは多様な働き方の実現に向けていろいろな取り組みを行っており、当館も参考にしたいということで講義をお願いしました。その中で、ポーラではトップが常にビジョンを意識しており、社

吉永 大山先生はNDLの元職員であり、私も昔から知っていますから、お話を聞きながら大変懐かしく思っていました。今日本の国会がどういう課題を抱えているかというところに絡めながらNDLの役割についてお話をいただいで、もっと積極的にサービスを提供していくべきではないかと感じました。一番は国会情報の公開促進という考え方で、胸に響きました。

田中 今持っている資源をデジタルで活用できるような形にしていこうと、紙資料のデジタル化をさらに推進していくことが、大きな柱です。

デジタルデータが溜まればいいという話ではもちろんありません。利用の基盤をどう整備していくかまで視野に入らなければなりません。紙は紙のメリットがありますが、電子で一元的に利用できる状況を実現することで、今までできなかったことができるようになるということが一番期待されることです。遠隔で広く利用できるということも一つですし、中身を検索して発見できる度合いを高めていくというのも一つです。出版物以外の情報資源と組み合わせる活用できるようなことを目指していくことも重要です。

デジタル化

大場 重点事業「デジタルシフト」の中で大きな柱になっているのがデ

ジタル化の加速です。デジタル化事業に長くかかわられてきた副館長



これまでできなかったことが実現していくんだというビジョンを広く共有したい。知の拠点である図書館の役割が、広い社会全体のデジタルアーカイブというものの中の一部分になるというようなイメージです。そういう意味では、図書館がその役割を十全に果たすために、やっとスタートに立ったところだと思えます。

とても大事なものは、出版物が経済行為として生み出されているということです。図書館は公共的な基盤として、無償での知へのアクセスを確保することが重要な使命だと思えますが、そのことと経済活動としての出版とが、どのように共存して発展していくことができるかを考えていくかないといけない。出版物が図書館の活動の要なのです。費用負担の問題も含めて、出版界のデジタル化の動向を見ながら、整備していくこ

とが必要です。

それから前ビジョンのユニバーサルアクセスという観点はこれからも重要です。障害者サービスということだけではなくて、人々にはいろんな制約や事情があることを前提に、少しでも多くの人に便利に使っていただけるよう、そのことを強く意識して進めていくべきだと思います。

大場 出版社との関係では、紙の段階ではある程度住み分けが明確だったものが、デジタルになったことによつていろいろ揺らいでいる部分もあり、そこをどう組み直していくのかというのが大きな課題だろうと思います。

続けて、デジタル化に関連して、具体的な計画の策定もいろいろ進んでいます。また、令和2年度第3次補正予算案に大きな額が計上されています。

ますし、コロナの影響を踏まえて著作権法改正の議論も進んでいるところ。こうした状況について、木目沢課長から、概要をお話しいただければと思います。

木目沢 NDLはおおむね5年ごとに資料デジタル化計画を改訂していて、次期の計画の対象期間は2021年度から2025年度までです。この計画では、デジタル化の優先順位として、インターネット公開や図書館送信など、利用機会の拡大を重視すること、それから学術的ニーズを優先することを追加しています。

図書については、これまでの計画で

は1968年までに刊行されたものを優先するとしていましたが、今回これを2000年までに拡大するのが大きな変更です。さらに本文検索や視覚障害者等の利用のための本文テキストデータの作成についても、出版社、著作権者の理解を得ながら進めていきます。

令和2年度の補正予算として、図書館のデジタル化作業、本文テキスト化の推進、システムの改修・拡張費用、館内でのデジタル化設備の整備費用として約60億円の家がまとめられました。1969年以降に刊行された国内刊行図書のデジタル化に着手します。本文テキスト化については、本文検索を目的としたOCRによる

いろいろな人たちが活躍できることが、結果的に様々な文化や学術、情報の基盤としての役割を果たしていく



大場 利康
総務部副部長



インターネットを介して、NDLの全ての資料が、世界中どこからでも利用可能となるのが夢です

テキスト化作業を行います。

著作権法改正については、NDLが主体となつてまず関わるのは著作権法の31条3項関係です。現在、図書館等へ送信している(図書館送信)

絶版などの理由により入手が困難な資料を、個人(家庭)へ送信できるように、システムや、サービス体制の整備を行う必要があります。かつて図書館送信を始める際には、「資料デジタル化及び利用に係る関係者協議会」という、出版関係者を含めた協議会によって、権利者、図書館

関係者との合意を得ながら進めてきました。今回の個人への送信についても同様に、関係者に合意を得ながら進めていく必要があります。

大場 先ほど副館長がおっしゃられたように、経済活動としての出版を尊重し、出版関係者との話し合いをしながら進めていく事業ということ

ですね。また60億の補正予算ですが、これが成立すれば、NDLの歴史上、二番目に大きな規模のデジタル化を行うことになるかと思えます。そして、著作権法の改正に関しても、個人に直接デジタルデータを送信できるようにになれば、館長のお話の中にあつたラストリゾートからファーストリゾートへとという転換がさらに進むこととなります。館長から意気込みを伺えればと思います。

吉永 私は戦後に生まれ、戦争を経験せずに戦後民主主義を享受してここまで生きてきました。こう言つてはなんですけど、コロナとの遭遇は、ニューノーマルという新しい価値・思想の転換をつきつけられたという思いです。図書館にとつても大きな転換点になっていくだろうと感じています。コロナ禍で図書館が閉鎖した中で、様々な要望が寄せられまし

た中で、様々な要望が寄せられまし

た。今回、デジタルシフトという方向性を出しましたが、それを実現していくことで、国民の声に対してきちんと応えていかなければなりません。

デジタル化の補正予算が大きく計上されましたけど、先ほど言われた制度的な改正も伴ってくるので、次のステップを提示する必要もあると考えています。

検索の手段等で情報の関連性をどういう形で結び付けていくのか、紙とネットを含めた包括的なアクセスをどう構築するか、またNDLだけでなく、他の図書館、博物館、美術館などを含む連携機関、関係機関と協力して、知的著作物、知的生産物

館などを含む連携機関、関係機関と協力して、知的著作物、知的生産物



木目沢 司
電子情報部電子情報企画課長

1
デジタル情報を駆使した高度な立法補佐。
国会サービスの充実



2
どこでも使える資料をより多く。
**インターネット
提供資料の拡充**

4
るを、より深く広く。
**「りたい」を
する情報発信**



を分散的に持ちながら、国民に対して知へのアクセスの保障としてその全体を提供するような仕組み、そう

いったグラウンドデザインを提示しなければなりません。

今後の展望

大場 それでは最後に、5年とわず長期的なビジョンや方向性、こういうことが実現したらいいとか、こういう役割をNDLが果たせるようになっていくのが理想といった展望を、みなさんから伺って締めたいと思います。

は、AIなどの技術を駆使した知識提供サービスを構築できればと思います。インターネットを介してNDLの全ての資料が世界中どこからでも利用可能となるのが夢です。あと、NDLサーチとジャパンサーチ⁽¹⁾、この取り組みをもっと充実させて、日本中の資料へアクセスできる基盤になれば。NDLが日本における知的情報基盤の中枢を担うようになるということが、将来の希望です。

木目沢 私が所属している電子情報部には次世代システム開発研究室が設置されていて、AIや先端技術を用いた電子図書館サービスの研究を行っています。今回、補正予算でデジタル化資料のテキスト化が組み込まれましたので、今後、大量のテキストデータをを用いた研究、それによるサービスの発展というのが期待されるかなと思っています。将来的に

国立国会図書館法前文の「真理がわれらを自由にする」というのは重要な理念だと思います。政策、政治的な社会の意思決定の場面で、できるだけ情報、知識に基づいて議論がなされるようにしていく。その



ためにNDLはもつと強化されなければならぬと強く思います。

その意味でも、社会における文化、学術研究をもつとリスペクトすべきなのではないかということはこの頃強く感じます。日本という国は、これから人口も減っていくし、高齢化などで、経済的に明るい展望はもてないのかもしれない。だからこそなおのこと、よって立つべき文化や学術への貢献を、全人類のためにも進めていかなければならない。NDLは、そういった部分を支えるという役割を果たしていければいいと思います。

デジタルというのは、物理的な障壁を越えるというのが最大の長特です。つまりこれからの知的情報基盤は、組織の中だけに留まるのではなくて、いろんな形でつながって広く大きな基盤となりうるのです。NDLが持っている資源はその一部です。図書館においては、これまで物理的なものを越えたネットワークと

というのが抽象的理念としてありましたが、電子の時代になって初めてそれが実現できるわけです。その中で重要な役割、リーダーシップをNDLが果たしていくことによって、知識情報に支えられた未来の社会の実現に貢献していくべきではないかと思えます。

吉永 グーテンベルクが印刷技術を開発したことによって知的行動が変

化しましたが、デジタル技術の誕生によって、それに匹敵するような変化が起きてきているんじゃないかとかねがね思っています。

人間にとってコミュニケーションは必須です。デジタル化することによって孤独化が進むという懸念も示されていますが、一方で新しいコミュニケーションが拡大するのではないかと思っています。その保障のために全体の基盤が必要になってくるだろうと思います。

今コロナ禍の中で、民主主義が揺ら

ぐとか、自由と統制が対立すると言われていますが、知的文化の価値が問われているのだと思います。世の中には誤った情報が膨大に流れているので、我々は正当なものを提供する心意が必要で、情報格差、経済的な貧困と戦うために、どういう形で図書館が、将来の知的保障をしていくことができるかを考えなくてはならない。

これまで、図書館というのは知識の記憶装置といった言葉で表現されてきました。人間が自分の脳に入りきらなかったものを保存するための脳なんだと。美術、音楽、映像など様々な創作物が図書館という脳には保存されている。それを共同で利用できるような、知の集合の提供が必要だと思えます。

いろいろな知識に触れて、文化の価値を支える。「真理がわれらを自由にする」という言葉の通り、人間が自由に自分の思想を発揮できる場を作るには、公的で普遍的な知識の提

1 文献のコピーを郵送、ファクシミリ、電子メール等で提供するサービス。
 2 F.W. ランカスター 著 田屋裕之 訳『紙からエレクトロニクスへ 図書館・本の行方』日外アソシエーツ 1987.1 <請求記号 UL11-83 >
 3 田屋裕之 (元副館長。1953-2013)
 4 国立国会図書館所蔵の貴重書をデジタル化して提供したサービス。2000年から2011年。現在は国立国会図書館デジタルコレクションで提供。
 5 国立国会図書館所蔵の明治期以降の和図書をデジタル化して提供したサービス。2002年から2016年。現在は国立国会図書館デジタルコレクションで提供。
 6 「インターネット資料収集保存事業 (Web Archiving Project)」。ウェブサイトを収集保存し提供するサービス。2002年開始。https://warp.da.ndl.go.jp/
 7 国立国会図書館で収集・保存しているデジタル資料を検索・閲覧できるサービス。2011年開始。https://dl.ndl.go.jp/

8 1900年代初めから1950 (昭和25) 年頃までに国内で製造されたSP盤及び金属原盤等に収録された、音楽・演説等の音源をデジタル化したもの。国立国会図書館デジタルコレクションで提供。2011年開始。
 9 「デジタル化資料送信サービス」。国立国会図書館のデジタル化資料のうち、絶版等の理由で入手が困難な資料を全国の公共図書館、大学図書館等 (承認が必要) の館内で利用できるサービス。2014年開始。
 10 「国立国会図書館サーチ」。国立国会図書館をはじめ、全国の公共・大学・専門図書館や学術研究機関等が提供する資料、デジタルコンテンツを統合的に検索できるサービス。2012年開始。https://iss.ndl.go.jp/
 11 書籍等分野、文化財分野、メディア芸術分野など、様々な分野のデジタルアーカイブと連携して、我が国が保有する多様なコンテンツのメタデータをまとめて検索できる、国の分野横断型統合ポータル。2020年開始。https://jpsearch.go.jp/



供が必要です。そこそがデジタル社会の基盤ではないでしょうか。それを図書館が支える、その一極をNDLが担う必要があるのではないかと考えています。

大場 非常に大きいテーマについて、みなさんからお話を伺えて、今日の座談会としては言うことはないと思います。

一つだけ付け加えるとしたら、今日の座談会のメンバーが、今一つ多様性としては物足りないのではないかなという面があるかなと（笑）。実際のNDLは、男女比の観点も含めて非常に多様な人たちが働いている場なので、もう少しそういった面を表現できる機会があるといいなと思います。

ジェンダーや、文化的背景も含めていろいろな人たちが活躍できることが、結果的に様々な文化や学術、情報の基盤としての役割を果たしている

くためにも必要ではないかと。そういったところも、これから一つの課題として考えていければいいなと思います。本日はありがとうございます。

「デジタルシフト」の先にある
「知の銀河系」をめざして



経緯や背景を通じて、ビジョンが目指すものを身近に感じていただけると嬉しいです



「知」へのアクセスが少しでも利用しやすいものになるよう、努力を続けていきます

デジタルシフトというビジョン達成に向けて、情報システムの面から貢献できれば幸いです



絵本への期待

— 平成の絵本作家と編集者、そして読者 —

今田 由香

国立国会図書館国際子ども図書館では、開館20周年記念展示会「平成を彩った絵本作家たち」の関連講演会として、京都女子大学発達教育学部准教授の今田由香氏を講師にお迎えし、平成の絵本とそれを取り巻く人々についてお話しいただきました。講演会の様子をダイジェストでお伝えします。(2020年11月29日(日)開催/講演筆記・文責 本誌編集担当)

はじめに

まず前提として、昭和までに培われた日本の絵本文化についてお話しします。1950年には岩波少年文庫の刊行が始まり、1956年には福音館書店が月刊の雑誌として『こどものとも』を創刊します。50年代、そして60年代に、至光社、童心社、こぐま社、偕成社などいろいろな児童書専門の出版社から高い志と意欲を持って作られた絵本が続々と出版されました。また70年代には、1977年に絵本の原画を展示する絵本の専門美術館である現在のちひろ美術館・東京も開館しています。そして1980年には赤羽末吉さんが、84年には安野光雅さんが国際アンデルセン賞の画家賞を受賞しており、日本の絵本が国際的にも高く評価さ



今田 由香氏

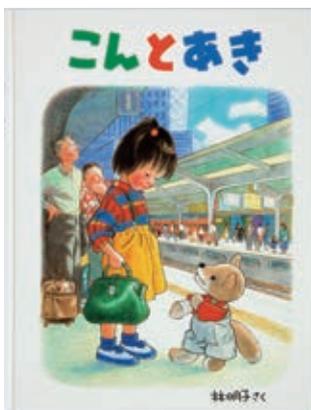
日本女子大学家政学研究科児童学専攻修了。2014年博士号取得(学術/日本女子大学)。浦和大学こども学部こども学科講師及び准教授を経て、2017年から現職。著書に『トミ・ウンゲラーと絵本その人生と作品』(玉川大学出版部)、編著に『絵本ものがたりFIND 見つける・つむぐ・変化させる』(朝倉書店)等、絵本と子どもに関する書籍を多数執筆。

れています。

そういった昭和の絵本と絵本文化を享受することができた子ども、あるいは若い人たちが活躍するようになったのが平成時代と言えると思います。

平成時代の幕開け

平成時代はその始まりから個性が際立つ、内容も表現も多様な絵本が出版されていきました。子どもの教育という視点からだけではなく、芸術性の高い絵本も続々と出版されて、またそれを評価する人たちも現れました。アートブックとして雑誌で絵本や絵本作家の特集がされるようになり、絵本の原画展も日本各地で行われるようになって、絵本のある暮らしというものが浸透していきます。絵本



『こんとあき』
林明子 さく 福音館書店 1989
<請求記号 Y18-4137 >

作家を目指す人、絵本を研究する大人も増えて、絵本や絵本の作り手に関する書籍も出版されていきました。

今回の展示のはじまりに**林明子**さんの『**こんとあき**』が選ばれています。林さんは大学を卒業後、星新一さんや筒井康隆さんの小説の表紙絵を手掛けていたイラストレーター、真鍋博さんのアトリエに勤務していました。そして職場の同僚であった五味太郎さんの紹介で絵本の仕事を始めることになりました。

林さんの物語絵本は、子どもの心の変化が伝わってくるお話が多いと思います。それを説明的な文章とか、あからさまな表情の変化とか、会話といったものに頼らないで、ていねいな描写でさりげなく心情を語っていくところにすごさがあります。

『こんとあき』は、あきという名前の女の子が大人の付き添いなしで特急列車に乗って、砂丘のある街までいくというお話で、その途中でいくつかハプニングが起きます。けれど、あきは怖いとか困ったとかいう言葉を発しません。その姿や情景で子どもの心情や嬉しさや心細さ、驚きなどを伝えていきます。

このお話は冷静になって考えてみると、不思議な点がいろいろとあり、あきのそばにいつもいるこんというキツネのぬいぐるみは、二足歩行して、人とも会話をし、あきを連れて切符やお弁当を買って列車で長い旅をします。でも絵本を読んでいる間は不思議なことや非現実的な展開があまり気にならないんです。それはなぜかと考えてみると、林さんは取材をしつかりして写真やモデルを使って絵を描くからなのでしょう。『こんとあき』ではこんのぬいぐるみも手作りして絵本を作ったとのこと。

林さんは実物を観察して絵を描く制作スタイルなので、絵には時代が投影されています。例えば、駅の風景もあきの服装も今読むと少し古めかしいような感じ

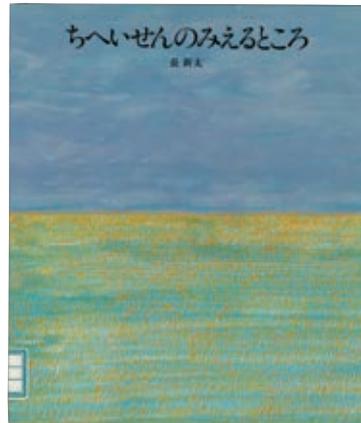
もしますが、それも含めてものの姿とか情景にリアリティがある。その細部に宿るリアリティこそが、ファンタジーに説得力をもたらしている作品です。

もう1冊、平成の始まりに出版された絵本として、『**the eyes**』シリーズに注目したいと思います。このシリーズは造本作家・デザイナーの**駒形克己**さんが、お子さんが生まれたことをきっかけに制作した絵本です。赤ちゃんの成長とともに楽しめる10冊のカード型の絵本のシリーズで、三つ折りにたたまれた紙を開くと丸や三角の形が現れたり、果物や動物などが姿を見せたりする趣向のカード絵本になっています。

このシリーズ6冊目の『**Little eyes 6 What color ?**』は色をテーマにした作品で、紙が丸く切り抜かれていて、そこからのぞくと色があり、ページを開くごとにその色をもつ動物とか植物が表現されている、開く楽しさがある絵本になっています。駒形さんは絵本を構造物としてとらえ、絵本の形や、素材にも関心を向けて絵本を作ってきた方で、紙の色、形、



『ユックリとジヨジョニ』
荒井良二作 ほるぷ出版 1991
<請求記号 Y18-5484>



『ちへいせんのみえるところ』
長新太作 ビリケン出版 1998
<請求記号 Y17-M99-736>
※エイプリル・ミュージック 1978 年刊の
複刊



『Little eyes 6 What color?』
駒形克己作者 偕成社 1991
<請求記号 YN1-49>

明るい色彩やポジティブな世界観で平成を彩ったのは、**荒井良二**さんです。荒井さんは子どもの頃はあまり絵本を読んだ記憶がなく、大学に進学してからマーガレット・ワイズ・ブラウンの『おやすみなさいおつきさま』や、**長新太**さんの『**ちへいせんのみえるところ**』などとお会って、絵本を作りたいと思うようになったそうです。

質感などにこだわった、視覚や触覚に働きかける独創的な絵本を数多く生み出してきました。その発想力とデザイン性の高さから、造本作家として世界的に高い評価を得ています。

また、平成、令和にかけて個人や少数での出版社が続々と出てきますが、駒形さんが主宰するブックレーベルであるワンストロークはその先駆けにもなりました。ワンストロークの絵本は、独立系の書店やギャラリー、雑貨店などでも取り扱われ、絵本にあまり親しみを持っていなかった大人たちや、デザインに関心を持つ人たちの注目も集めていくようになります。

最新作は『こどもたちはまっている』という絵本で、長新太さんの『ちへいせんのみえるところ』へのオマージュ作品であると荒井さん自身が発言しています。長新太さんが亡くなったのは、2005年のことでもう15年が経ちました。長新太さんの絵本は、読者にとっても、絵本を作る人たちにとっても大きな存在であり続けていることがわかります。

編集者の土井章史さんとの出会いをきっかけに、『ユックリとジヨジョニ』という絵本を発表し、絵本の制作だけではなく、映像作品にも携わって「スキマの国のポルタ」で文化庁メディア芸術祭のアニメーション部門の優秀賞を受賞するなどしています。活動は海外からも高く評価され、2005年にアストリッド・リンドグレン記念文学賞を受賞し、日本人初ということで大きなニュースになりました。雑誌で特集されたり、ドキュメンタリー番組が放映されたりしたことで、音楽やファッションに関心があるような若い人たちも荒井さんの絵本を好きになって、絵本の文化が若い人たちの中にも根を下ろしていくことに繋がりました。



なかやみわさんの『そらまめくんのベッド』も平成生まれの子どもたちにと

ても愛されてきた絵本です。なかやさんは子どもの頃からキャラクターグッズがすごく好きだったので、絵を描くことも好きで、サンリオに就職してキャラクターデザイナーの仕事をしていました。でも時間をかけて生み出したキャラクターでも、売れないとすぐに使えなくなってしまうたり、次々に新しいキャラクターを作らなくてはいけなかったりして、いつしか切なさを感じるようになったそうです。その時たまたま行った書店の絵本売場に、自分が子どもの頃に読んだ絵本が並んでいて、「ああ、キャラクターたちがずっと愛される絵本を作りたいな」と、本格的に関心が芽生えたということです。

なかやさんの絵本には、そらまめ、どんぐり、クレヨンといった子どもたちに身近なものが擬人化され、仲間とのかかわりを通じて成長する姿が描かれています。キャラクターたちは、自分の気持ちに率直で、時々意地悪なことを言ったり、間違ったことをしたりしてしまう、幼い

子どもたちのような姿で、読んでいると親しみを覚えます。

平成中後期 2000年以降の流れ

2000年代初頭の変化としては、2000年が子ども読書年で、5月には国際子ども図書館が部分開館しました。2001年4月には、ブックスタートの活動が日本でも本格的に始まって、赤ちゃん絵本の出版がますます活発になり、赤ちゃんから絵本に親しむというところが一般的になりました。また、大人が絵本キャラクターのグッズを身に着的たり、講演会やライブペインティングなどのワークショップで絵本作家や編集者と読者が出会う機会も増え、絵本の読者層が広がり、絵本を楽しむ方法も増えてきました。

絵本そのものについては、遊びの要素がある絵本やキャラクターに魅力がある絵本が人気になり、また、形も大きさも素材も様々な絵本が出版されるようになりました。絵本の作り方を学べる場や、絵本作家になることができるようなコンクールなども続々とできました。絵本を

作る、出版する方法も、多様化していき、また、絵本を取り巻く状況というのは、平成という時代の中でどんどんにぎやかになっていきます。



『そらまめくんのベッド』
なかやみわ さく・え 福音館書店
1999 <請求記号 Y17-M99-1145 >



かがくいひろしさんの「だるまさん」

シリーズは、「泣く子も笑う絵本」として大きなインパクトがありました。かがくいさんの絵本には、お餅やだるま、やかんや布団といった日本的なモチーフが登場します。それらを擬人化して、読んでいる人がつかかわりたくなるような、「どんな人でも楽しんでいいよ」と言ってくれそうな人情味や温かさ、そしてみんなを笑顔にするようなユーモアにあふれた世界を展開していきます。

どうしてそういう絵本が作れたのかなと考えてみた時、かがくいさんが、子どもをよく知っていた作家さんだったというのが大きいのではないかと私は思っています。

かがくいさんは、大学卒業後に特別支援学校の教員をしていて、教員生活のかわら、人形劇の活動をしたり、造形作品の発表をしたりしていました。絵本作家としては、2005年に『おもちのきもち』で講談社のコンクールに応募して、絵本新人賞を受賞してデビューしています。それ以降、次々とユニークな絵本を発表していきますが、2009年9月に

病で逝去なさってしまっ、お元気だったらどんな絵本を作ってくれたのかなと思わずにはいられません。主体的な読書を誘うかがくいさんの作品というのは、平成後期を代表する絵本のひとつであると思います。

学生や大人にも絶大な人気を誇っている絵本作家に、**ヨシタケシンスケ**さんがいます。ヨシタケさんは会社勤務を経てイラストレーターとして活躍するようになりました。かがくいさんの絵本もそうですけど、ヨシタケさんの絵本に登場するキャラクターたちにも、そんなにキラキラした人たちはいなくて、平凡な子どもや大人の日常を肯定して、固定観念にとらわれずに、自分で考え直してみることの面白さを提案してくれる絵本が多いと思います。

『**それしかないわけないでしょう**』という絵本があります。「未来の地球が大変なことになるぞ」というお兄さんの言葉がきっかけで、未来について女の子が考えていく絵本なんですけど、今年こんな状況になって家から出られない毎日の

中で、ゼミの発表でこの絵本を取り上げたいと言った学生がいて、みんなで読んでんです。学生たちが読んだ後「すごく気持ち良かった」と言っていて。

世の中にあるいろいろなことにはたくさんの可能性があるはずなんですけど、このような状況にあると、先が全く見えなくて不自由で、大人でも苦しい気持ちになります。でも物事は別の角度から見てもみたり、別の発想をしてみることで、自分の気持ちが少し楽になったりということがありますよね。そんなきっかけくれるような作品をヨシタケさんは作っているんだということを改めて感じました。

次に**ミロコマチコ**さんについて触れたいと思います。ミロコさんは児童文学の創作を学びたいという思いで大学に入学し、在学中は人形劇団を立ち上げて台本を書いていました。でも、人前に出ることが好きで、やがて絵本作家を目指すようになります。

2012年に『オオカミがとぶ』と



『オレときいろ』
ミロコマチコ 作 WAVE出版 2014
<請求記号 Y17-N14-L1018 >



『それしかないわけないでしょう』
ヨシタケシンスケ 著 白泉社 2018
<請求記号 Y17-N19-M153 >



『だるまさんが』
かがくいひろし さく ブロンズ新社
2008 <請求記号 Y17-N08-J88 >

という作品で絵本作家としてデビューします。2015年には『オレときいろ』という絵本でブラティスラヴァ世界絵本原画展の金のりんご賞を、そして2017年には『けもののおいがしてきたぞ』で金牌を受賞し、デビューから瞬間に世界で評価される作家になりました。

ミロコさんのライブペインティングを見る機会があったんですけど、目に見えないものの力を感じ取って表現に取り組んでいるように見えました。絵本の絵も何を表しているのかすぐにはわからないものが多いですが、ページをめくっていくと、絵とともにある言葉が、絵に方向性とか意味を与えて、何らかのストーリーが見えてきます。すると、動物とか自然とか、目に見えないもの、絵本の中にいるものに近づけたような、それらの声が届こえたような喜びを感じることが出来ます。不思議な読書経験をもたらしてくれる絵本を作る作家です。

おわりに

現在、私たちが予想もしなかった日々が続いています。だからこそ絵本に何が

できるのかな、どんな絵本がこれから生まれるのかな、あるいは今ある絵本がどんな風に楽しめるのかな、と考えています。

今回の展示に、2011年3月11日に起きた東日本大震災に関する絵本を特集しているコーナーがあります。社会の変化の中でテーマも表現も多様な絵本が生まれていて、子どもたちを励ますものもあれば、事実を伝えようとするものもあります。

今私たちに起きていることに関わる絵本もこれからいろいろと生まれてくると思います。それをまた振り返りつつ、絵本に何ができるかなというのを何度も何度も考えていくことが必要なんじゃないかなと感じています。

今田先生はこのほかにも、平成を彩った絵本作家や、絵本作りに欠かせない編集者など、たくさんのお話をしてくださいました。お話を聞いた後は「絵本に触れたい!」という気持ちがあふれて止まりませんでした。

皆さんは最近、本を使って調べものをしましたか？ 普段から本に親しんでいても、ちょっとしたことならググって解決、という方が多いのではないのでしょうか。本で調べるのは手間だし……なんて思った方もいらっしゃるかもしれません。

でも、ちょっと待ってください。例えば、貴方が電車に乗っている時に、隣からこんな会話が聞こえてきたとします。「昔、上野動物園で、穴を掘って檻から脱走して、2日間行方不明になった動物がいたらしいんだけどさ……」会話の主はそこで電車を降りてしまいました。さあ、何の動物か気になりますよね！ ではひとまずネット検索を駆使して調べてみてください。話に完全に合致した動物は見つかりましたか？

突然何の話始めたのかと思われたかもしれません。国際子ども図書館には中高生向けの、「調べものの部屋」があります。名前のとおり、調べものをするのに役立つ資料が約1万冊置かれています。ここでは、中高生を対象とした「調べもの体験プログラム」というものも実施しています。

このプログラムには、館内を探索するスタンプラリーや本のPOP広告作成など、6つのコース

があり、その中の一つに、図書館資料を使って調べものを体験してもらうために、私たちが用意した問題の答えを調べてもらうコースもあります。お勉強というよりクイズや謎解きのような雰囲気です。参加してくれた皆さんは大抵楽しんで取り組んでくれます。

しかしながら、この調べもの問題設定が、なかなか難しいのです。図書館資料を用いた調べもの重要性を実感してもらうために、出題する問題の中には、ネット検索だけでは正解を導きづらいものを取り混ぜるようになっています。また、出典も明示していない怪しげなページで一応の答えが見つかってしまうケースも多く、それらの不確かさや真偽を確かめることの重要性なども、うまく伝えていかねばならないと感じています。

実際、先ほど上野動物園の脱走動物を調べてみてください。くださった方は、ネット検索の限界を感じたのではないのでしょうか。答えはもちろん、調べものの部屋にある資料で調べるとわかります。英語でAardvarkと呼ばれる動物で、これを日本語でなんというか調べるのは、ネット検索でも事足りません。うまく併用していきたいものですね。

(児童サービス課 調べもの仕掛人)



答えは本の中に

日記の世界

あなたは、日記をつけたことがありますか？

国立国会図書館は、2021年3月に憲政資料室の所蔵する日記資料等をインターネットで紹介する電子展示会「日記の世界」を公開しました。この電子展示会では、近現代の500点以上の日記資料をご覧いただけます。

これらの日記資料は、これまでも近現代政治史等の分野において、貴重な歴史史料として、研究者を中心に利用されてきました。今回の公開では、より多くの人に日記資料に親しんでもらえるよう、様々な工夫を行っています。

ここでは、この電子展示会の機能やコンテンツの一端をご紹介します。どうぞ実際にアクセスしてご覧ください。

スマートフォンからも
ご覧いただけます。



インターネットでどなたでもご覧いただけます。

<https://www.ndl.go.jp/nikki/>



コンテンツ・機能紹介

年表から日記を見る

今回取り上げた様々な人物が日記に実際に記述した一節を引用し、1850～1970年代まで、年代ごとに並べて紹介しています。クリックすることで、実際の日記画像と簡単な解説もご覧いただけます。これらの一節を入口として、日記資料の他のページを国立国会図書館デジタルコレクションで読むこともできます。

例：1860年代以前の日記より



寛永7年1月25日（1854年2月22日）

黒船に乗ってきた人を見る

為人皆、長身、而白肌緑眼、而高鼻短髮。【人となり皆、長身、白肌緑眼、高鼻短髮。】

詳しく

安政5年7月初旬（1858年8月初旬）

コレラの流行

当地にコレラと噂ふる伝染病流行、日々死するもの数百人なり。この疾を受るや吐しゃ烈しく数時間にして死するあり。未だ是を治するの薬方なしといへども、是を余【予】防するの法あり。蘭人【オランダ人】教師ポンベ氏是を着して差出せり。この疾は始めて伝来せるにて古医も知るものなかりし。亜墨利加【アメリカ】船ポーターにて支那より伝来せりと云ふ。或は魯西亞【ロシア】船アスコルトより伝来せり杯との風評なり。市中の騒動大方ならず、愚癡を払ふと号し、鐘大鼓にて騒ぎ回り俗も祭礼の如し。



詳しく



解説

黒船が再来航した際に、実際に乗組員を見た際の手記です。他のページでは船や、星条旗の絵も載っています。



万延元年5月5日（1860年6月23日）

根田門外の変風聞

噴火山を東北に見、十時浦賀港に下碇す。聞くに、過る三月三日大老榊井伊公登城の途、外根田において浪士のため殺害せられ、午後浪士等榊奕を主張し、外国人を襲わんとするの儀あるとし、騒然たりと。

詳しく

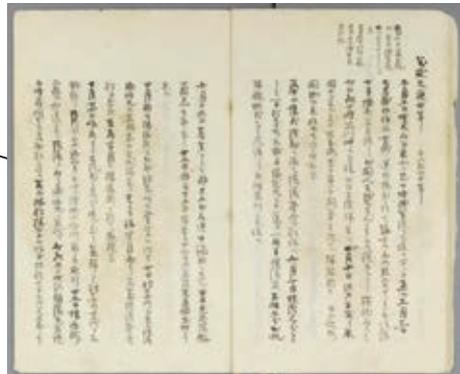
文久2年7月4日（1862年7月30日）

船内ではしかが流行

雨。御船乗組の者、多分麻疹疾に付、当分間所に碇泊相成る。



詳しく



解説

咸臨丸による航海でアメリカから浦賀に帰港した赤松は、航海中に大老井伊直弼が江戸城への登城中に水戸浪士等に暗殺された、いわゆる根田門外の変についての聞き書きを記しています。



文久2年8月2日（1862年8月26日）

穏やかな海へ出航

快晴。星少く海面油を流せし如く、夕七時御船当港出船、志州浦へ向。夜中遠州灘へ進む。この灘は兎角【とにかく】波立荒き所なれ共、風これ無きに付致で穏静。

詳しく

文久2年11月19日（1863年1月8日）

長州藩士の外国人襲撃計画

前夜萩藩の士十三輩、横濱の異人を討たんとし、生妻村まで出張せしに、この秘密の事書を薩藩の士聞得て、土州の老侯に密告せしが、老侯この事を動使に告られしに早々留むべきとのことを廟堂に達し、長州家に運命せられし故、長州の世子直に同所へ懇切、出張せられ、また土州の藩士も出張し理解して引留たりと。



詳しく



文久3年1月1日（1863年2月18日）

元旦にシャンパンで乾杯

午前十時「シャンパン」酒を酌みて礼を為す。蘭人【オランダ人】また席席相祝す。和蘭水夫その外皆揃同行に向けて新年を賀す。

詳しく

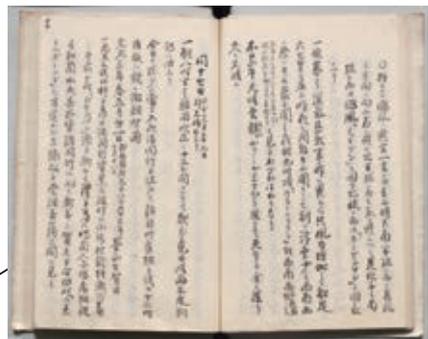
文久3年1月1日（1863年2月18日）

船上の元旦

一同早朝起出、藍染の紋付に小袴着用。元旦の式を行ふ。午前十時頃



詳しく



解説

オランダ留学に向かう船上にあった榎本は、正月を祝いました。この日は、西暦では1863年2月18日にあたりと日記にも記されています。

例：芦田均のページ

人物から日記を見る

幕末・明治期に活躍した伊藤博文、岩倉具視、榎本武揚といった人物から、軍人である大山巖、児玉源太郎、戦後の総理大臣芦田均、大平正芳まで、40人以上の人物について、実際の日記本文から一節を紹介するとともに、その人物の日記一覧をご覧いただけます。一部の人物については、刊行された日記の情報も付しています。

日記の著者一覧




日記資料は研究者にどのように活用されているのでしょうか。今回「日記の世界」の監修を担当した季武嘉也創価大学教授・国立国会図書館客員調査員をはじめ、6人の専門家から、日記を史料として用いた読み物を寄稿いただきました。政治家等の日記から広がる世界をお楽しみください

歴史史料としての日記／日記で読む政治史

コラム

日記にまつわる8つのコラムを掲載しています。

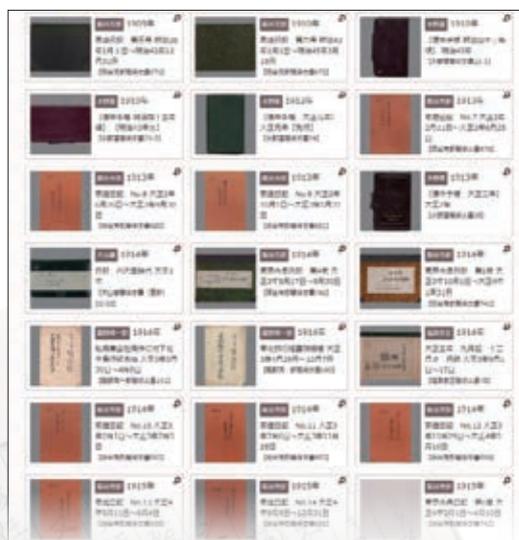
- ・ 咸臨丸、発展途上の船出 —— 赤松とブルックの日記から
- ・ 古代をのぞく海外旅日記 —— 杉浦讓の「文久奉使日記」から
- ・ 榎本武揚のシベリアにおける写真収集
- ・ もう1人の女子留学生、内田政
- ・ 日記に記した異国情報 —— 幕末・明治初期の渡航者
- ・ ロンドン海軍軍縮条約の締結とラジオ —— 二人の日記と「雑音」
- ・ 東芝の再建 —— 石坂泰三の決意
- ・ 日記の附属資料は宝の山？ —— ここから何が見えるか



掲載日記一覧

今回電子展示会で取り上げている500点以上の日記資料を、人物別や年代順にご覧いただけます（一部館内限定公開の資料があります）。

今後も、憲政資料室で所蔵している日記資料は、デジタル化し、電子展示会や国立国会図書館デジタルコレクションに追加していく予定です。



キーワード一覧

日記から引用した一節を、選挙、国会、外交など、特定の内容でまとめてご覧になれます。

例：キーワード「第二次世界大戦」



国立国会図書館では、「日記の世界」以外にも多くの電子展示会を公開しています。各コンテンツでは、国立国会図書館所蔵の様々な資料について、わかりやすい解説を加え紹介しています。

https://www.ndl.go.jp/jp/d_exhibitions/

本屋に

ない本



全国知事会七十年史

全国知事会 編集・発行
2018.6 1157p 22cm
<請求記号 A114-L177>

全国知事会七十年史 (資料)

全国知事会 編集・発行
2018.6 595p 22cm
<請求記号 A114-L178>

令和2(2020)年から猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症(COVID-19)への対応をめぐっては、政府の役割もさることながら各地方自治体、とりわけ都道府県知事の役割に注目が集まっている。本書は全国の都道府県知事によって組織される全国知事会に関する資料である。

知事は、戦前は天皇によって任免される官吏であったが、戦後、日本国憲法と地方自治法が制定され、そのもとで都道府県知事は現在のような公選となった。知事は国の機関から独立した機関となり、その共同の目的達成のための連絡機関が発足し、昭和25(1950)年から「全国知事会」となった。全国知事会は、「各都道府県

間の連絡提携を緊密にして、地方自治の円滑な運営と進展を図ることを目的」としている(全国知事会規約第3条)。全国知事会は国に対し要望や政策提言も行っており、新型コロナウイルス感染症への対応における国への提言を報道で耳にした方も多いただろう。

本書は本編と資料編の2冊からなる。本編は、第1編が知事会発足から60年、第2編が最近10年の歩みについて詳述している。農林水産業や国土・社会資本の整備など、政策分野別の活動をまとめているのに加え、東日本大震災や基地問題への対応等にも言及している。各政策課題に対する知事会の活動が記述の柱になっているが、経緯等が詳細に記されており、地方に関係

する主な政策課題の経過を知るのに役立つ。

第3編は、主に1990年代以降の地方分権への取組について、350頁以上を費やして詳述している。第1章では、地方分権の本格化から、地方分権推進法の制定(平成7(1995)年)を経て、地方分権一括法の制定(平成11(1999)年)に至る第一次分権改革の経緯を概観している。第2章から第5章では、平成13(2001)年から平成17(2005)年までの、国庫補助負担金の改革、国から地方への税源移譲、地方交付税改革の「三位一体改革」の経緯について、第6章以下では、平成18(2006)年からの第二次分権改革について、主な動きをほ

ぼ1年につき1章を割いて詳細に記録している。地方分権改革で実現した、地方に対する規制の緩和や権限の移譲の背景に、知事会による国への働きかけなどがあつたことがわかる。

資料編では、歴代知事等の一覧や、知事会の活動等に関する年表が掲載されている。数百ページに及ぶ年表からは、知事会が頻繁に声明の発表や国に対する要請などを行っていることが驚かされる。

本書は、本文の記述と資料がともに充実しており、単に全国知事会という団体の活動史にとどまらず、戦後から今日に至る日本の地方分権の歴史を知ろううえでも有用な資料と言える。

(山本健太郎)

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介いたします。

資料のデジタル化に伴う原資料の利用休止について

国立国会図書館では、所蔵資料の保存と利用の両立を図るためデジタル化による媒体変換を行い、作業が終了した後は、原資料に代えてデジタル化資料を提供しています。このデジタル化作業のため、次のとおり一部の資料の利用を休止しています。

- 利用休止期間 令和3年9月末日まで(予定)
- 対象資料

東京本館所蔵の国内刊行雑誌 33タイトル 約1,300冊

※現在ご利用いただけない資料は、国立国会図書館オンラインの書誌詳細画面の所蔵一覧上に、「作業中」の表示でお知らせしています。ご利用にあたっては、事前に検索してご確認ください。

※詳細については国立国会図書館ホームページの資料の保存・資料デジタル化について・デジタル化作業に伴う原資料の利用休止についてに掲載しています。

ご不便をおかけしますが、国民の文化的資産を後世に伝えるため、ご理解とご協力をお願いいたします。

全国新聞総合目録データベースの提供を終了します

国立国会図書館サーチを通じて提供してきた全国新聞総合目録データベースの提供を終了します。令和3年度第1四半期以降の終了を予定しています。長年にわたりご利用いただき、ありがとうございました。

なお、同データベースの令和3年3月31日時点でのデータを次のとおり公開する予定です。

- 公開するデータ
 - ・資料の種類：マイクロ資料、複製版等。原紙は、一定期間で廃棄され所蔵期間が変動することが多いため除きます。
 - ・書誌情報等：資料名、所蔵館・所蔵期間、当館所蔵資料の場合には当館請求記号
 - ・データ形式：CSV形式
- 公開方法
 - 国立国会図書館リサーチ・ナビ上で公開します。
 - <https://navi.ndl.go.jp/navi/>
- 問合せ先
 - 利用者サービス部 図書館資料整備課 新聞係
 - 03-3581-2331(代表)

新刊案内

レファレンス 841号

アメリカ連邦議会下院改革の動向―下院現代化特別委員会と第116議会の改革―
我が国における取締役会制度をめぐる動向
2000年以降の農業構造政策の展開過程―農地制度、農地集積手法、水田農業政策―
道路空間再編の現状と課題



A4 101頁 月刊 1,000円(税別)
発売 日本図書館協会

カレントアウェアネス 347号

コロナ禍における米国立シカゴ大学図書館の対応と日本研究支援
米国立イェール大学図書館における日本語エフェメラ資料の収集・整理・提供の実例
米国立シカゴ大学図書館の写真資料をどう捉えるのか…現状・全体像・日本への還元における課題
▲動向レビュー▼
絵図・古地図のウェブ公開と差別表現への対応の現状
資料保存をとりまくネットワーク―災害対策と地域社会をめぐめる動向―



A4 28頁 季刊 400円(税別)
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03(3523)0812

NDL Topics

韓国国会図書館、韓国国会立法調査処との業務交流(第10回)

令和2年12月16日に韓国国会図書館(NAL)、令和3年2月4日に韓国国会立法調査処(NARS)との共同セミナー方式による業務交流を、ウェブ会議で行いました。

NALとの共同セミナーでは、「図書館におけるITの活用」をテーマに、NALからは新たな知能型分析サービス「アルゴス(Argos)」を中心とする議会情報サービスについて、当館からは次世代システム開発研究室の取組を中心にA- (機械学習) を用いた新たな図書館サービスの開発についてそれぞれ報告し、活発な議論を交わしました。NARSとの共同セミナーでは、「脱炭素社会」をテーマに、両国の脱炭素政策等、それぞれの国内動向を中心として報告し、意見交換を行いました。

第13回科学技術情報整備審議会

令和3年1月13日、第13回科学技術情報整備審議会がオンラインで開催され、審議会委員・専門委員8名のほか、館長、副館長、幹事等職員16名が出席しました。提言案「第五期国立国会図書館科学技術情報整備基本計画策定に向けての提言―『人と機械が読む時代』の知識基盤の確立に向けて―」について審議が行われ、全会一致で了承されました。提言は、東京本館で出席していた竹内委員長代理が西尾委員長に代わって館長に手交しました。

提言では、オープンサイエンスの普及等で加速する研究・社会のデジタルシフトの中で、人々に信頼される知識基盤を確立するには、図書館のデジタル化が不可欠としています。また、「人」による国立国会図書館のデータの活用を広げる方向性を示すとともに、データ駆動型研究を促進するため、「機械」を新たな読者として位置付けています。その上で、全文テキスト化等を含む資料のデジタル化や、著作権法改正の動きを踏まえた資料へのアクセスの容易化、教育等における利活用モデルの構築、未収資料のデジタルデータでの収集など具体的な取組を進めることが重要であるとしています。

館長からは、具体的な取組等を更に検討した上で、「第五期国立国会図書館科学技術情報整備基本計画」を策定し、提言内容の実現を目指す旨の発言がありました。



提言を含む審議会に関する情報は、国立国会図書館ホームページ>事業紹介>科学技術情報整備>科学技術情報整備審議会 (<https://www.ndl.go.jp/jp/collect/tech/council/index.html>) に掲載しています。

科学技術情報整備審議会委員名簿

(五十音順 敬称略) (令和3年1月13日現在)

委員長	西尾 章治郎	大阪大学総長
委員長代理	竹内 比呂也	千葉大学副学長
委員	石田 徹	日本商工会議所専務理事/専門図書館協議会理事長
	喜連川 優	情報・システム研究機構国立情報学研究所長/東京大学生産技術研究所教授
	ロバートキャンベル	人間文化研究機構国文学研究資料館長
	児玉 敏雄	日本原子力研究開発機構構理事長
	佐藤 義則	東北学院大学文学部教授
	塩崎 正晴	文部科学省大臣官房審議官(研究振興局及び高等教育政策連携担当)
	戸山 芳昭	国際医学情報センター理事長
	濱口 道成	科学技術振興機構構理事長
	藤垣 裕子	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部教授
	村山 泰啓	情報通信研究機構戦略的プログラムオフィス研究統括
専門委員	生貝 直人	東洋大学経済学部准教授
	北本 朝展	国立情報学研究所教授

展示会

スポーツと子どもの本

Sports and Children's Books

入場
無料



2021年 3月9日(火) ▶ 6月13日(日)

開催予定が変更になる場合があります。最新情報については、公式ホームページなどをご確認ください。

会場

国際子ども図書館
レンガ棟3階
本のミュージアム

開館時間

9時30分 ~ 17時

休館日

月曜日、毎月第3水曜日(資料整理休館日)
国民の祝日・休日(5月5日のこどもの日は開館)

1. 『リリィス』草野たき 著 中島梨絵 装画 ポプラ社 2010 2. 『ぞうの金メダル』高藤洋 作 高島那生 絵 偕成社 2004 3. 『フラダン』古内一絵 作 今中新一 装画 小峰書店 2016 4. 『バッテリー』あさのあつこ 作 佐藤真紀子 絵 教育画劇 1996



International Library of Children's Literature

国立国会図書館 国際子ども図書館

4

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2021.4

NO.720
APRIL
2021

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
Chie no akebono—Children’s magazine full of the spirit of civilization
- 06 Vision 2021-2025
The Digital Shift at the National Diet Library
—Seven initiatives for connecting information resources and intellectual activities—
- 08 Discussion: Promote the Digital Shift at the National Diet Library
- 18 Lecture by IMADA Yuka “Hopes for Picture Books—Picture Book Authors, Editors and Readers in the Heisei Era (1989-2019)”
- 25 Digital exhibition “Diaries—Collections from Modern Japanese Political History Materials Room”
- 24 <Tidbits of information on NDL>
The answer is in a book
- 29 <Books not commercially available>
Zenkoku chijikai nanajunenshi
- 30 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和3年4月号 (No.720)

令和3年4月1日発行

発行所 国立国会図書館
編集者 三浦良文
責任者

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<https://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2 0 2 1 . 4

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図

国

国

書

人

士